雑 感

山口 格*

2月に入ってこの春卒業していく、若い人たちの論文を読むのに追われているところに、原稿の締切りが迫ったからと事務局の方から警告が寄せられ、日頃のなまけぐせの報いとあわせて書き始めたこの小文が読者諸氏のお目にとまるのは春を迎え、大学の研究室でも、会社でも新しく入った人たちのテーマが決まるころと思われる。

日本を取り巻く国際的状況が大きく変わり、また国内においても、ともかく経済的に大きく発展をした現実をふまえて、これからの日本はこうあらねばならぬということが日々論ぜられている。われわれの生きる化学とその工業の分野でもいろいろな観点から考えるべきことが多い。私自身、大学の工学部にあつて、これからの教育と研究に対して模索の毎日を送っている。

化学工業というものが——極端ないい方をすれば——原子力工業に象徴されるような純理論から生れたものではなく、いわば生活の知恵の発想から出発した部分が多く、近代的工場の中においてすら、いわゆる学問としての化学と、化学工業の間に端的に表現できぬ何かが厳然と存在している現在、大学において純学問的立場をとる理学的研究と、工業を常に意識して研究をしていく工学的研究と、そして直接企業内の研究との間には、それぞれの特色が、なお発揮されるべきではなからうか。

だんだんスケールの小さくなっていく、日本の大学の研究、一品料理的なものが多く、堂々たるフルコースのメニューにおめにかかる機会が少ない。企業でも安易な技術導入の時代が終わり、一企業ではどうにもならぬ問題も多いと思われる。それぞれの特色を生かす研究を遂行するためには、制度的にも、経済的にも困難は多いが、それはそれ乾坤一擲、取り組みたいものである。

比較的古い時代に源を発している化学工業のなかには、おのずとできてきた一つの考え方、枠があり、それに合うように一つのプロセス、一つのオペレーションが出現する。あるいはその逆で、プロセスなり、オペレーションが少しずつ枠をつくってきたのかもしれない。枠の中に住むとなかなか外の世界が見えにくい。枠をつくるのに大いに寄与した50年、100年前の考え方は、現在でもすばらしいものもあるうが、枠からはみ出したものがすべて、価値がなかったわけではあるまい。枠から少しでもいいから身をずらして問題をとらえたいと念願している。

国境のない学問の世界と、国境の存在する工業との間のどの位置に、自分がかかわりあいを持っているのか、はっきり認識していきたいものである。

* Tadashi YAMAGUCHI 東北大学（工学部応用化学科・980 宮城県仙台市荒巻字青葉）教授・工博